



利根山光人

Toneyama Kojin

第92号 平成28年10月1日

記念美術館通信

Memorial Art Museum News Letter

〒024-0043 岩手県北上市立花 15-153-2

TEL/FAX 0197-65-1808

利根山光人記念美術館 平成28年度企画展開催中 三人展—高橋大八・伊東才紀・中野光雄— 元専任研究員合同作品展 平成28年8月27日(土)～11月30日(水)

利根山光人記念美術館開館20周年を記念し、今回の企画展は、長年美術館を支えてくださった元専任研究員3人の作品を展示しています。

高橋大八氏は平成8年4月1日から平成25年11月30日まで、伊東才紀氏は平成14年4月1日から平成21年11月30日まで、中野光雄氏は平成15年4月1日から平成25年11月30日まで、専任研究員として美術館開館以来、受付や美術館通信の作成、絵画教室などに携わっていただきました。

ご自身が精力的に多くの作品を作成された中から、優しい色合いの個性あふれる作品を是非、見にいらしてください。



『遺したい北上の風景画』



想い出「故郷」

北上市主催の絵画教室に応募し、千田浩文先生の御指導のもと初めて油絵に挑戦。そして絵を描く楽しさを学ぶことが出来ました。

でも、スケッチを行なったこともないため何を描けばよいのか、なかなかキャンバスが埋まりませんでした。そんな中、昔撮った写真の中に「茅葺き屋根」の家がありました。幼いころを思い出しながらこの「茅葺きの家」を描いてみました。

今ではほとんど見る事が出来なくなっていました「茅葺き屋根の家」。北上市の「みちのく民俗村」で大切に保存、保管されているのがみられます。

子供の頃には数多く見る事が出来たのに、時代の流れでしょうか・・・

絵を描く楽しみ、そして仲間との出会いを大切にこれからも続けて行きたいと思っています。

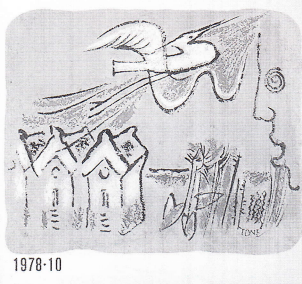
千田 廣繁さん
(利根山光人記念美術館光の会)

北上市所蔵美術品紹介

『早稲田学報』とは早稲田大学校友会が発行している会報であり、利根山光人画伯は数年その表紙を描いていました。今回は昭和 53 年 10 月 15 日発行の中の「表紙によせて 見るなの蔵」より藤田圭雄氏の文章を抜粋して紹介します。

「民話には、それを語り伝える人々の、偽らない、飾らない、生の気持ちが描かれている。喜びや悲しみだけでなく、人間がもつ、うらみそねみ、数々の欲望のようなもの、いろいろな形で人生の複雑な褶を作り出す要素として書き出されている。見るなの座敷の系統の物語もそのひとつだ。好奇心と欲望という二つの心の動きは誰にでもあり、なかなか制御できないものだ。」

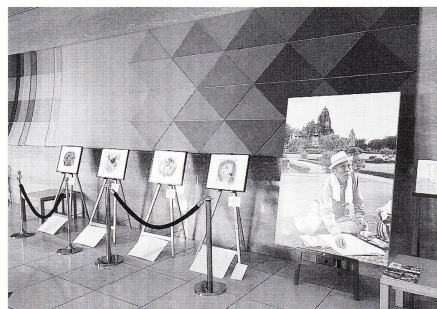
早稲田学報



1978-10

早稲田学報 10月号
(1978)

利根山光人記念美術館開館20周年記念 ～「利根山光人展」開催中！～



ホテルシティプラザ北上ロビー にて開催中！

平成 28 年 10 月 31 日(月)まで

北上川と展勝地そして、利根山光人記念美術館が見えるホテルシティプラザ北上のロビーにて、利根山光人画伯の作品を展示させていただいています。

好評につき 10 月まで延長になりました。これから紅葉の季節、展示作品の入れ替えもしておりますので、足をお運びいただき、美術館とは違う雰囲気の中で画伯の作品を是非御覧ください。

利根山光人記念美術館と私～美術館から見える山～

嫌な事、あるいは失敗した事は鮮明に記憶していて、楽しかった事はなかなか記憶から出てこない。そんな自分はネガティブ思考なのだろうか？

その思考の中でも、一瞬の出来事、ある日の風景、出会った顔、その場の空気感、風さえも思い出す。家から毎日見る西山は、時間、季節、心身の調子によって同じ山でも表情が違って見える。

山の絵は多くの人が描いているし、日本はどこに行っても山があるから、今更描く気にならなかった。フランスのパリからノルマンディとバルビゾンまで 100km 以上バスで旅行した時に見た景色は、日本では当たり前にある山はなくただゆるやかな大地だった。

日本に帰ってきて、改めて日本の良さを知った旅になった。

それから急に厳しい冬の西山を描きたくなり、しかも迫りくるように素直に描きたいと思った。

子どもの頃、絵を描くのが楽しかったことを、長く描いてきて忘れてしまっていたのかもしれない。

山の下には静かな木々があり我々の住んでいる家、生活がある。山同士、山の高さを競い合っているようだ。

長年通っている美術館からは家から見る山の表情とまた違って見える。

四季折々の美術館からの山の表情を皆様も是非見に来てください。

高橋 平光

(利根山光人記念美術館専任研究員)

